

活動状況等報告① 水辺環境等



斐伊川水系 水鳥プロジェクト

斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会

1. 水辺環境・鳥類(合同)ワーキング報告

(1) ワーキング開催概要

東部(中海周辺エリア)、西部(宍道湖・斐伊川・神戸川周辺エリア)に分け、生息環境づくりにあたっての基本的条件等について議論を行った。

日 時	(東部) 2024年2月 1日 (木) 19:00~21:00 (西部) 2024年1月25日 (木) 15:30~17:00
場 所	(東部) 米子水鳥公園 会議室 (オンライン併用) (西部) 国土交通省 出雲河川事務所 大会議室 (オンライン併用)
参加メンバー (東部)	(公財)中海水鳥国際交流基金財団 常務理事兼事務局長 神谷 要 米子水鳥公園ネイチャーセンター 館長
	(公財)中海水鳥国際交流基金財団 米子水鳥公園 統括指導員 桐原 佳介
	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部 副支部長 田中 一郎
	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部 理事 津森 宏
	NPO法人日本野鳥の会鳥取県支部 理事 土居 克夫
(西部)	米子水鳥公園友の会 副代表 山中 克子
	(公財)しまね自然と環境財団 島根県立三瓶自然館サヒメル 副館長 井上 雅仁
	日本野鳥の会 島根県支部 北脇 努
	島根大学 非常勤講師 佐藤 仁志
	日本野鳥の会 島根県支部 野津 登美子
その他	(公財)ホシザキグリーン財団 ホシザキ野生生物研究所 調査研究課 課長 林 成多
	(公財)ホシザキグリーン財団 ホシザキ野生生物研究所 所長 森 茂晃
	協議会参加自治体の関係部署 国土交通省 出雲河川事務所 (公財)日本生態系協会
主な議題	①大型水鳥類の生息環境づくりにあたっての基本的条件の整理

(2) 主な議事内容

◆大型水鳥類の生息環境づくりにあたっての基本的条件の整理

- ・国管理河川におけるこれまでの環境調査結果等を示すとともに、自然再生事業による生息環境づくりの検討のため、以下の河川区域について整備イメージ(案)を示し、意見交換を行った。

東部(中海エリア)	大橋川河口左岸
西部(斐伊川・神戸川・宍道湖エリア)	西代橋下流左岸(ワンド整備) 斐伊川河口部左岸出島地先

◇ワーキングメンバーからの意見等

- ・中海の浅場整備と大型水鳥の採食環境づくりについて、採食環境の規模が重要になってくる。(東部)
- ・浅場整備事業により整備された環境を大型水鳥類が利用するとは限らないが、少なくとも中海の生態系の質向上に貢献する。(東部)
- ・大橋川河口左岸について、過去にあった離岸堤を撤去した結果、ねぐらとしての利用がなくなった。ねぐら環境が再生されれば、大橋川北側の水田を採食地とするコハクチョウのグループが復活する可能性がある。(東部)
- ・整備したワンドをどのように維持していくかが問題。
→「環境」目的で整備したものの維持管理を事業化できる制度は国にはない。また、維持管理の不要なワンドを整備することは難しいことは認識している。トキやコウノトリの採食地になるのであれば、出雲市や雲南市との連携のもと維持管理ができればと考えられる。(事務局)
→整備された環境の維持管理について、先行事例ではどのような役割分担・体制で行っているのか、関係者で視察を行うことも考えられる。(西部)
- ・出島地先は先行事業からも高い効果が期待できる。早く進めてほしい。(西部)



ワーキングでの意見等を踏まえ、令和6年度に斐伊川河口左岸出島地先での整備を進める(次ページ)。

今後の方向性

河川・湖沼において自然再生を進めていく箇所、整備内容の基本的な検討

斐伊川本川以外の河川・湖沼における整備イメージについて引き続き検討を進める。

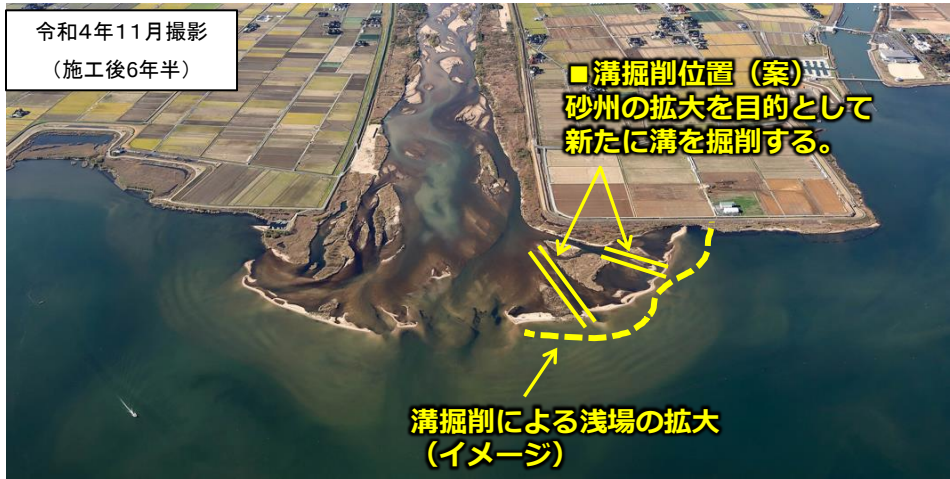
短期目標等達成状況の評価

環境調査結果等をもとに、大型水鳥の生息環境づくりの進捗状況を分析し、不足部分の抽出と今後の対応について検討を進める。

2. 出雲河川事務所による生息環境づくり(宍道湖出島箇所水路掘削)

■平成28年度と同様に溝の掘削を行い、浅場（主に生物の個体数が増加した砂嘴）の拡大を図り、魚類・底生生物・抽水植物（マコモ等）が生息・生育可能な環境の拡大を目指し、大型水鳥類（抽水植物を餌とするハクチョウ類、魚類・ベントス類を餌とするトキ・コウノトリ・ヘラサギ類等）の餌場場所やねぐらにもなり得る環境を創出する。

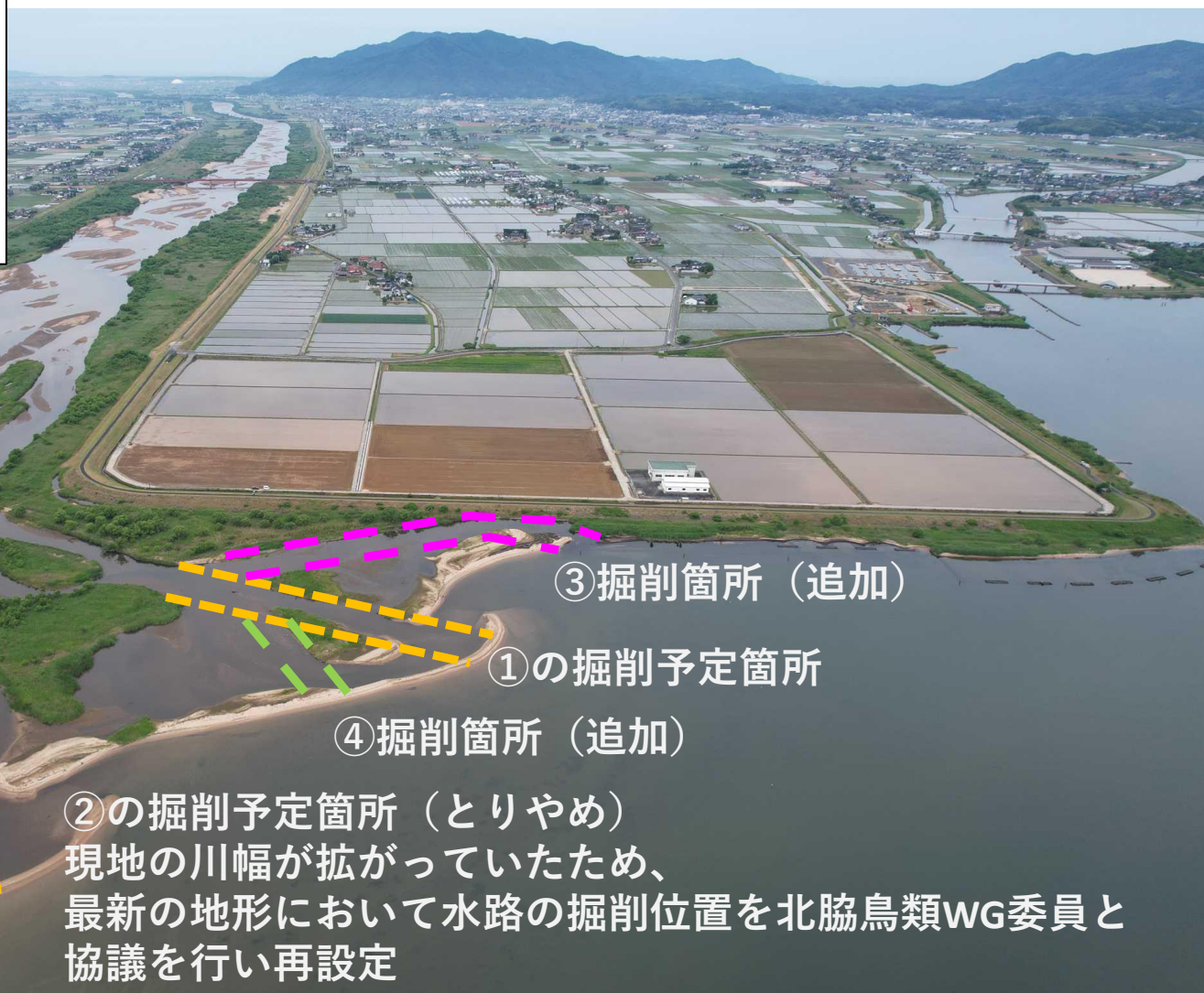
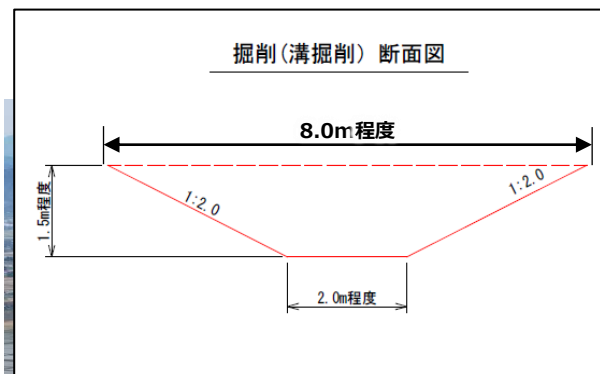
【イメージ】



【設計条件】

設計項目	設計条件		出典
溝掘削の幅・水深	・ H28に出島地区で掘削した溝は幅(3m以上)・水深(冬季水位で1.5m以上) ・ 掘削により、砂嘴の範囲が拡大し、生物個体数の増加を確認 ⇒溝掘削は幅 3.0m 、水深 1.5m を目安とする。		令和4年度鳥類・水辺環境WG資料 ※キツネや人の浅場への侵入を抑制する幅及び水深として設定
水深	形成される砂嘴	現状の出島地区の砂嘴部の水深：水際から100m程度の範囲で0.2m程度 ¹⁾ ※R4.11の測量結果	1)斐伊川流域グリーンインフラ推進研究会資料 2)「川の生物図典」(平成8年、奥田ら) 3)「長良川河口堰湛水域におけるヨシ群落の死滅の原因-全国各地のヨシ群落の観察からの考察-」(令和2年、山内・古屋) 4) Habitat Use of the Black-faced Spoonbill(平成16年、Yat-tung Yu and Cornelis Swennnen) 5)中海水鳥渡来水域学術調査報告書(昭和58年、島根県) 6)第51回日本生態学会での報告(内藤・大迫・池田) 7)「トキの野生復帰を支援する川づくり」(平成13年、リバーフロント研究所) 8)魚類から見た必要流量について(平成11年、リバーフロント研究所)
	植物	マコモの生育水深(淡水)：0.2～1.0m程度 ²⁾ ※汽水はより浅い場所と想定 ヨシの生育水深(汽水)：0.0～0.3m程度 ³⁾	
	大型水鳥類	ヘラサギ類の採餌水深：0.06～0.21m ⁴⁾ ハクチョウ類の採餌水深：0.5～0.6mより浅い場所 ⁵⁾ コウノトリの採餌水深：0.05～0.3m ⁶⁾ トキの採餌可能な水深：約0.1m以浅 ⁷⁾	
	魚類が移動可能な最低水深	10cm以上 ⁸⁾	
	⇒溝掘削による砂嘴の拡大により、多様な生物が生息・生育できる環境が創出され、大型水鳥類の採餌場所やねぐらにもなり得る。		

宍道湖出島箇所水路掘削(着手前:令和6年5月30日撮影)



中央道湖出島箇所水路掘削(掘削完了:令和6年6月26日撮影)

